・胃・が・ん・で・手・術・

2008.1 岡安喜三郎

昨年夏の定期健康診断で見つかった胃がんも、切除手術が無事終了しました。当初は胃がんと宣告されびっくりしましたが、胃の中央下当たりにできた早期胃がんでした。隣接リンパ節への転移もなかったようで、「幽門輪温存胃切除術」という手術よって、あくまで確率の問題ですが、現在のところ「ほぼ」完治すると言われ、また私もそう思っています。

結果として分かったことも含めますと、胃がん自体の大きさは３cmほど、深さは粘膜（T1）まで、リンパ節転移なし（N0）、他組織転移なし（M0）、病理組織診断では印環細胞がん（Signet-ring cell carcinoma）です。ステージとしては早期がんに入ります。

そもそも何の自覚症状のない時点で定期健康診断で見つかったことが結果として幸いしたとしか言い様がありません。７月に大塚駅北口近くにある診療所で行った職場の定期健康診断で疑われたことに始まります。８月２１日に内視鏡検査（胃カメラ）と生体採取検査の追検査を行い、29日にＣＴ検査も行い、早期胃がんであると宣告されました。

「手術のため直ぐに病院に行け」とは言われても、たまたま東京都との関係で深刻な雑件を抱えていた最中でしたので、その事務処理が最優先です。その終了後、紹介状を持って地元の大学病院に行きました。最初に、「言われた診断名」「今後生命に深刻ながんが見つかったらがん告知は受けるか」等のアンケートがあります。病院でも、内視鏡検査と生体採取検査の追検査を行い、同様の診断で、９月に入院しました。「この内蔵脂肪では手術は時間がかかりますね」ですと。

入院したら、慎重すぎるとの印象を持つほどの諸準備が待っていました。第１はがんの種類、転移の有無などです。もっとも、正確には手術時の検査でなければ分からないそうですが。第２は健康検査の類で、伝染病の有無や、合併症を惹き起こし易い糖尿病などの病気の有無です。第３は体力検査で、血液酸素量や肺機能検査など、手術に耐えられる体力かどうかです。

手術は５時間かかりました。やはり内蔵脂肪のせいだそうです。痛さは、全身麻酔と患部局部麻酔の併用で、術中も術後も患部そのものの痛みは基本的にありません。術後２、３日までの痰を出したり起き上がる際、腹筋を使う時に皮膚創部が引っ張られ、痛みがある程度です（これが実際にはとても痛いが、数日で痛みはなくなる）。

この手術を経過して８kgほど痩せました。これが内部脂肪の減少によってもたらされたものなら良いのですが、実際は足や腕の筋肉が削がれて痩せたものです。術後はさまざまな意味で体のバランスが崩れてしまっていましたが、現在は回復しつつあります。食事や酒には「暴飲暴食」以外の制限はありません。しかし胃が小さくなったので食べられないので、飲食１回の量は極端に少なくなりました。

１月に入り、退院後２ヶ月検診を受けましたが、傷口も順調に回復しているようです。その後、「がんのひみつ　がんも、そんなに、わるくない」（中川恵一著、朝日出版社）という新刊本（昨年12月20日発行）を見つけました。読み切ってみると、「がんで死んでもいいかな」と何かほっとする心境になったから不思議です。

■